

大会コントローラー報告①

大会コントローラー 野中 俊樹

1. はじめに

まず、今大会の開催にあたり、ご尽力頂いた関係各位の皆様や、多大なるご協力をして頂いた地元関係者の方々に深く感謝致します。学生諸君はこのような多くの方による支えがあってこそ大会が成り立っている事を肝に銘じ、今後の大会の継続・発展に貢献して頂きたい。さて、ここでは主に競技面に関しての報告を行う。その他に関しては、別途木村氏からの報告で補完されているため、併せて参照して下さい。

2. 地図・コースについて

まずトレインの適格性の判断についてであるが、今回コントローラーに指名されたのは9ヶ月前（規則では2年前まで）であり、すでにトレインの調査が始まっていた。しかし、付近の旧マップや、調査途中の作図、実際にトレインの一部に入ってみて、十分なものである事が後に分かった。

調査に関しては、2005年世界選手権地図作成チームの方々が行っており、プロも含め精鋭陣であり、精度の高い地図が完成した。しかし、調査終了期限が迫っても、中心部分ではほとんど進んでいない個所があったりしたため、コースプランや試走に影響を及ぼしてしまった。後述するが、縮尺や登距離に関する判断も遅くなった。結局、内容に不満があっても事前に決定していた地図完成期限を守る（それでもインカレには充分の精度）のか、地図完成期限を遅らせる事により精度を更に向上させる（その代わり後の作業に支障をきたす）のかを選択しなければならなくなった。地図調査というのは言うまでもなく根幹部分であり、その状況により準備作業に影響を与える。今後は、調査の進捗をチェックする人を配置するなど、対策をとる必要性を感じた。

コースに関して、2点の特例措置をとった。1点目はクラシック競技に用いる地図の縮尺を、1:15,000から1:10,000に変更した点である。理由は地図作成と試走の結果、クラシック競技範囲は予想以上に地形が細かく、縮尺1:15,000の地図ではこれを読み取りづらいことが判明したからである。1:10,000ではロングレグで地図上のレグ距離が長くなり見づらい点や、これを避けることでルートチョイスが減る事が懸念されるが、今回のトレインは範囲も狭く、かつ主要道で林がいくつかに分断されており、そもそもロングレグが組めないため、1:10,000によるデメリットは生じないと判断した。2点目は男子クラスの登距離が6%を若干であるが越えた点である。前述したように道路で林が分断されているが、それぞれのエリアは大きな丘となっており、トレインが狭いこともあって、この丘を何回も出入りする事が主要区である。急峻なトレインでコースが何回かクロスしていればアップ率（登距離/実距離）が多くなる事は十分予想されよう。しかし、6%以下を守るとひたすら道路走りを増やす事となり、競技性は大幅に落ちる。今回のコースは充分な競技性を

保ちつつ過度な体力勝負に偏る事のない、良質なコースであると認識している。もちろん可能であれば6%以下を遵守すべきである。ただ三河地区でのICは近年も予定されていない様々な局面に出会う事は予想されるだろう。

地図記号についてであるが、最新のIOFに基づいた。このため、具体的には尾根や道の分岐が従来記号と異なっている。

3. 競技について

(1) 全体的な特徴

クラシック、リレー共に、コース難易度やコントロール位置など適切なコースが提供されている。地図の良質な精度も含め、公平な競技性が保たれていたと思う。また、気の抜く部分が無く、集中力を持続しなければならない濃密なコースであった。選手は地図読みから解き放たれるのは最終前コントロール以降だけであったであろう。

(2) 個人クラシック・ディスタンス競技について

優勝時間はクラシックに関しては男女共に規則の+5%程度であり、ほぼ規則を満足したと言えよう。ただ男子に関しては入賞者のうち1、2位こそはシード選手であったが、3~6位はシード選手ではない。この事に象徴されるように、急峻かつ適度なヤブかつ微地形により1回のミスからのリカバリーに時間がかかったのであろう。女子はシード選手とそれ以外では実力差が大きかったため、結果は順当なものであった。ただ実力差がありすぎるのも問題である。他選手の奮起を期待したい。

(3) リレー競技について

リレーに関しては女子のトップは+5%程度だったものの男子は+10%を超えてしまった。事前にコースを見た段階で少しばかり長めなのかもしれないとは予想されていた。しかし、運を出来るだけ排除し、かつ各校の実力差を明確にするためには、このコースは適切であり、更に1割以上も短くするとこのトレインでは競技性が落ちてしまう。また、実行委員の試走では40分程度で走破している者もいる。コースが長めになったのは申し訳ないと思うが、もっと学生諸君には良いパフォーマンスをして欲しかったという気もする。また前述したように、ミスからのリカバリーに時間がかかるトレインであったが、リレーの方が緊張感、使命感が高いからであろうか、通常では考えられないようなタイムロスをした選手が散見された。優勝争いは男女共に最後まで分からず、非常に見ごたえがあった点を付け加えておく。

(4) その他

・シード選手

男子はクラシックでは不本意な結果の選手でも、リレーではある程度の結果を出しており、

面目躍如であった。飛びぬけている選手達がいなかったのが今年の特徴であろう、女子は逆に速い人とそうでない人の差が大きく、これはシードが例年になく強いわけではなく、選手層の薄さが原因であり喜ばしいことではないと思う。

・競技者数（選手層）

今回、クラシックは男子 60 名、女子 40 名と従来の 2/3 と大幅に減少した。学生の減少に合わせたものである。しかし下位層のタイムは似たテレインである 2 年前の愛知インカレ時とそれほど変わらない。

公認大会の場合規定時間は優勝者の 150%であるが、これを今レースに適用してみると、男子はほぼ全員が規定時間内である一方で、女子は半数近くが規定時間外となってしまう。クラシックの人数に関してはまだ熟慮が必要であろう。

・男子 3 人制の是非

今まで 60 分×4 人（昨年は規定 50 分であったが実際は 60 分）であったが、今年は 4 人制を維持する一方で、一人当たりの更なる時間短縮が行われた（規定=40 分×4 人）。競技時間の短縮となり運営面の負担軽減にはつながったが、完走率は依然と低い。クラシックでは女子の方が実力差の開きが大きいものにも関わらず、リレーでは完走率が男子より高い点も注目である。また、距離が短いと会場から近い範囲しかコースが組めない。テレインによっては会場付近に道路、田畑、民家が多く、競技性の高い林の奥は離れた位置にある事もある。何も 3 人制の方が良いと言っているのではなく、これからも議論していった方が良いと感じた次第である。

3.おわりに

大会の会場にいてちょっと寂しいと感じた。これは単純に人数が少ないからであり、私自身が最も参加者が多い時期に選手として参加していたためそう感じたと思う。当時、優勝したチームですら消滅してしまった。ひとたび構成員がなくなってしまった大学を復活させる事は困難であろう。しかし、大学の数を増やす事が人数の復活に大きく貢献するのは確かである。自分の大学の新歓活動はもちろんのこと、新規に開拓する事も是非チャレンジしてもらいたい。また、公認大会も含む一般の大会での参加者も激減している。学生さんは是非、大学を卒業してもオリエンテーリングを続けて欲しい。学生時代の良い思い出で終わらせず、地域クラブに入って活動を継続して下さい（インカレ運営も…）。

大会コントローラー報告②

大会コントローラー木村佳司

1. これからの学生選手権大会「変わるインカレ」

インカレが崩壊しつつある。

最盛期千数百名を集めた頃に比べて参加者の数が半減し、資金的にも人的にも立ち行かなくなってきた。学連はここでインカレを大きく変革しようとしている。

721名。これが先日開催された2002年度インカレクラシック種目の学生参加者数である。最盛期のインカレは千数百名の学生参加者があったが、今はその半分の規模になった。10年振りにインカレ会場に行った人ならその減少ぶりを肌で感じるができるだろう。以前のインカレの開会式と言え、開場前から各大学の特攻隊が行列をなして場所取りに血眼になった。リレー会場に選手を乗せたバスが到着すると、応援場所を確保するためにダッシュする姿を見ることができた。しかし今やそんな風景は過去のものとなりつつある。学生連盟への加盟員数は第2次ベビーブームが大学を卒業することから減少し、最盛期2700名ほどいた加盟員は1300名程度に留まっている。ここ10年ほどで加盟員は半減しているのである。20年ごろ前から始まった少子化の影響、学生のスポーツ離れは、各学生スポーツ団体が問題となっているが、オリエンテーリングもその例外ではない。

1979年春に第1回インカレが開催された時、インカレは1日だけのイベントだった。個人のレースを行い、その総合タイムを大学毎に集計して団体戦順位を競っていた。この時のインカレは参加者がまだ数百名のイベントであったが、熱血な若手OBの活躍のおかげで地図や競技面では日本をリードする競技会へと育ってきた。インカレは与えられるものではなく、自らが作り出すものだという気風が満ちていた時代だった。そして参加人数も徐々に増えてきた。

第7回の日光インカレを境にインカレは大会規模を拡大する。競技は2日間となり初日が個人によるクラシック競技、2日目が団体戦のリレー競技となった。この時のテレインは今でもオリエンティアの聖地と言われる日光。素晴らしいテレインに最高の地図、そして最高の競技環境。このときからインカレは日本最高の競技会となったのだ。その後も学生参加者数は増え続け、運営者たちは膨大な参加者を宿泊輸送する手段と、最高のテレインとをどのように両立させるかで悩んだものだった。

肥大化するインカレ。増え続ける学生オリエンティア。学生オリエンティアの人数がピークだった1993年、春のインカレとは別に秋にインカレショート大会が始まった。当時豊富にいた学生オリエンティアと学生OB

を中心に、こちらも徐々に参加者数を伸ばした。1997年の富士宮大会では総参加者数は1000名を越え、名実ともに秋のビッグイベントになった。

しかしその頃から学連加盟員の減少は始まっていた。先日行われた愛知インカレでは学生参加者は700名強。この数字はインカレが2日間制になった時点まで戻っている。参加者数の減少により、今までのインカレ開催規模を保つことが難しくなっている。それはひと

つは参加費収入の減少、もうひとつはOBの減少による運営者の減少である。

オリエンテーリング用地図を作成するのは実に手間のかかる作業である。いくらコンピュータ作図が進んだとはいえ、フィールドワークは相変わらず人手によるものだ。当然そこには多くの費用が発生する。現在の春のインカレはクラシック競技で使用する地図とリレー競技で使用する地図の2区域を用意することが多い。資金が豊富なうちはこの2区域分の地図を用意することができたが、参加者数が減少してゆく中で、2区域分の地図を確保することが困難になりつつある。特にクラシック競技で使用する範囲は非常に広い区域が要求されるため、それを調査・作図する資金が大量に必要となる。一方、その広い区域を使用する選手権クラスの人数は先日の愛知インカレから削減されている。

また2区域を使用するとなると、競技会場も2箇所に分散することが多くなる。こうなると全く独立した2つの大会を行っているのと同じで、運営人数がかなり必要となる。学生の競技人口が減少するなかで、大字OBに頼った現在の運営形態では、運営者を集めることも難しくなっているのである。

愛知インカレ2002の実行委員長・三浦千鶴は、開催地・愛知県より遠く離れた神奈川県在住である。別に

愛知県に地縁があるわけでもない彼女が実行委員長を務めるということが現在の運営者不足を象徴している。

ここで日本学連ではインカレのダウンサイジングとも言える改革を進めている。それはインカレを次頁の基準で行おうとするものである。

- ・開催時期は従来のインカレと同じく、各年度の3月に開催する
- ・ミドル競技（従来のショート競技）とリレー競技の2日間制
- ・作成地図は1枚。これを2日間使用する。
- ・会場はミドル、リレー競技とも共通。

見とおしとしては2004年度インカレ（2005年春開催）よりこの形態のインカレに移行する予定である。2003年3月10日の日本学連総会にて発表された2003年度～2005年度のインカレビジョンは以下のとおりである。

2003年度インカレ：ショート矢板（塩谷）

クラシック・リレー青山高原

2004年度インカレ：ロング愛知（三河高原）

ミドル・リレー目光（今市少年自然の家）

2005年度インカレ：ロング愛知（三河高原）

ミドル・リレー愛知（場所未定）

2. IC2002における運営のダウンサイジング

これらのインカレ改革に先駆けて、愛知インカレ2002ではさまざまな運営のダウンサイジングを行った。

- ・会場をクラシック競技とリレー競技で共通にしたこと
- ・会場名などを事前にきちんと公開したこと
- ・クラシックのスタートエリアを選手権・一般クラスとを共通にし、それを事前に公開したこと
- ・クラシック選手権のフィニッシュを会場までちょっと強引に誘導したこと
- ・クラシック一般クラスの地図回収を行わなかったこと

まで、インカレ運営には一種独特の「秘密主義」とも言える価値観が横行していて、実際に何度もインカレ、運営に立ち会うたびにこの秘密主義を感じることもある。競技の公平性を保つために主催者が守秘義務を負う事はオリエンテーリング大会において多々あることは否めない。だが守秘義務は競技の公平性を保つための手段であって目的ではない。主催者はどこまで守秘義務を負わなくてはならないのか？それは参加者をどこまで信頼するかにかかっている。しかし、インカレは学生が主催する競技会のはずである。単なる主催者である実行委員会が、主催者の学生を信頼しないというのは誠におかしな話である。実行委員会は参加者が公平に競技を行う最低限を提供し、運営コストの増大をもたらすような過度な公平性の確保はしないという、考えてみれば当たり前の運営を行ってもらうように心がけた。

たとえば、トレインと会場を公開し、立入禁止区域を事前に公開する。トレインと会場を公開することに実行委員会の作業内容は減少する。これは運営コストの減少を意味する。そのかわりに学生は立入禁止区域をきちんと守り、競技会が公平に行われるように努める。もうひとつ、たとえば選手権スタートと併設スタートを共通にする。運営人数は削減されこれも運営コストを削減する。そのかわり各参加校のオフィシャルや参加者は会場とスタートを往復して競技情報を伝達しないように公平性の確保に努める。各施策の結果、運営者の数は最盛時のインカレ運営者数の半分程度で乗りきる事ができた。かなりギリギリの運営面もあったが、それは今後の効率化の課題である。

3. IC2002 の運営トピックス 10

(1)交通事故発生！

リレー競技中のランナーが県道でモーターバイクと接触事故を起こしてしまった。

<被害状況>

参加者：骨折

バイク運転手：運転手に大きなケガは無し

バイク道路外に転落し損傷

参加者はリレー競技のコース最後の部分にある歩道の無い県道に沿って走っていたところ、後方から接近

したバイクを避けようとして進路変更した。同じ方向にバイクも進路変更したため接触事故となった。この事故はオリエンテーリング競技中ではあるが、通常のランニングにおけ

る事故と同じ発生状況である。特に問題があるコース設定はなく、こうした事故を防ぐには県道そのものを走らないコースにするしかない。しかし今回のテレインではこうしたリレーコースを組むことは不可能である。

(2) 飛んだテント

今回は風が強かった。会場となる小学校の校庭に張ったテントが、高さ数 m まで舞い上がり、落下した。校庭の反対側からその光景を目撃した私は、救急車の出動を覚悟した。しかし人的被害はほとんどなかった。これは単に幸運だっただけで、場合によっては重大事故になる可能性が充分にあった。強風の場合はテントの脚に錘を付けるなり、脚をペグで地面に打ちつけるなりの十分な対策が必要であることを痛感した。今後のインカレや学連行事では、この教訓を元に、十分な対策を施すようにしてほしい。

(3) 多かったケガ人

先に述べた交通事故だけでなく、今回のテレインでの大会は病院に運ばれるようなケガ人が多かった。比較的急斜面の場所が多いからだろうか。今後も愛知でのインカレ開催が計画されている。今後も参加者に十分な注意とテーピングなどの呼びかけを行って欲しい。なお、運営側の救急に対する準備は良くできていたと思われる。今後もある程度の怪我人を想定した運営を行うこと。

(4) 少ない運営者

今回の運営者は本当に少なかった。大会が回せるギリギリの人数だったと思う。クラシックのスタート地区やリレーのスタート誘導などでは急遽運営ボランティアを募ってなんとかその場を凌いでいた。本当に実行委員は良くやってくれたと思う。今やこのように少ない実行委員で開催できない限り、インカレの継続開催は難しいと思うので、ぜひこの方針続けていってほしい。

(5) ギリギリの開会式

競技運営以上に少ない運営者で乗りきったのが、開会式だった。学生が舞台の上も裏もつくりあげた開会式で、それはそれで良かったのだが、実行委員会メンバーが極少数だった。サブコントローラの私も充分に働かせてもらった。

(6) 会場が断水？

大会当日は会場となった小学校で水需要が増したため、小学校の給水タンクがカラになり会場が断水状態に陥った。幸い地元のかたが食品を販売してくださっていたので、なんとかして下さることができたが、やってみないと判らないことであるもんだなあと感じた一件だった。今後のインカレ運営の参考にして欲しい。

(7) 花屋瞬時即売

毎回インカレ会場に花の販売を頼むのだが、今回は会場近くの花屋の商売ッ気がなく、学連理事関係者による花束の販売を行った。それでもリスクのある入荷をすることができないため少な目の入荷による販売を行ったところ、入荷即完売状態であった。花束販売に実行委員会が絡む必要はないが、うまく活用すると収益の補助になると感じた。

(8) 守られた地元資産

クラシック競技ではコースの途中に集合アンテナが合計 3 箇所あった。ひ弱なアンテナで競技者が誤って

引っかかって倒しかねない構造だったし、そこから民家に伸びるケーブルも誤って引っかかれれば壊しかねないものだった。こうした地元資産を壊せば、この地域でのオリエンテーリング活動の今後に多大な影響を与える。そこで、今回は徹底してこの集合アンテナの保全に努めるように実行委員会にお願いした。その結果、集合アンテナの周囲はこれでもか！と思えるほどのストリーマと立入禁止テープが巻かれて、その結果、数百人が競技しても集合アンテナに対する損害を与えることはなかった。こうした地元資産の保全はとても重要である。今後のインカレ運営でも受け継いでいって欲しい。

(9) トレイル O ますます盛んに

今回よりトレイル O がインカレ併設大会のひとつとして実施され、多くの参加者がトレイル O に参加した。トレイル O は小学生から大人まで、そして健常者も障害者も同じフィールドでできるスポーツであるということもあり、インカレへ障害を持った学生や地元参加者を呼び寄せることも期待できる。今後もトレイル O との連携を進めていければと思う。

(10) インカレは後輩のために？

「後輩たちにインカレをプレゼントする」一般的にはこれがインカレを運営する OB 達のモチベーションとして最も大きいものだろう。自分の出身大学がインカレで力いっぱい走る。競技の成功、そして失敗、どちらもが感動するシーンでもある。しかし、実行委員長三浦千鶴の出身校「信州大学」からのエントリーは無かった。そうオリエンテーリングクラブが消滅してしまったためである。彼女はモチベーションが保ちにくい状況で良く実行委員長をつとめてくれたと思う。逆に自分の出身大学がインカレでバリバリがんばっている大学の OB たちは、もっとインカレ運営に貢献して欲しいと思う。チームオフィシャルやコーチとして選手と一緒にインカレを目指すのもいいが、インカレという舞台そのものをプレゼントする立場に回って欲しい。そういう人たちが居なくなれば、自然にインカレは無くなってしまう。

学生のみなさん、インカレは毎年自動的に開催されると思いこんでいないだろうか。イン

カレが開始されて四半世紀経ったが、この間ずっと、学生にインカレをプレゼントしたいという OB 達の強い思いだけでインカレは成り立ってきた。次は自分たちがインカレを後輩にプレゼントする番になる。インカレは勝手には開催されない。自分たちで創るしかないのだ。